

# 文法記述のために—動詞のばあい—

まつもと ひろたけ

## 【要 旨】

日本語動詞の活用現象を、形態論においてどのように記述していくかについてかんがえる。

動詞の事例は共通はなしことばをみわたすが、諸方言の動詞の文法の記述に役だつことをねがっている。活用タイプの整理につづいて、活用体系をパラダイムにどうおさめるかについて、終止形をとりあげて論じる。国文法でのあつかいが、活用タイプ、活用体系双方にわたって不完全、不十分なことにもふれている。

## 【キーワード】

動詞、活用タイプ、活用体系、終止形、パラダイム

## □はじめに

文法の問題はおおきく文の文法（構文論）と単語の文法（形態論）とにわかれる。その記述もたがいにかを前提にしつつすすめられるのが原則だが、ここでは最初から単語の文法をとりあげる。単語が品詞にわかれ、品詞には名詞、動詞、形容詞、副詞などがあることもわかっていると、動詞の形態論についてみていくことにする。動詞の形態論でなく、動詞の活用（現象）とよんだほうがわかりやすいかもしれないが、一方では活用という用語で国文法のことばかりおもいかべられてもこまる。国文法でのあつかいの欠陥は、いちいちの箇所でのべておく。

## □動詞からはいることの意味

動詞の文法に関する説明は、文をくみだてるうえでもっとも重要な記述になる。動詞は特に日本語のようなS+O+Pの語順タイプの言語では、おうぎのカナメのような位置をしめ、他の文の部分＝単語がかかわってくるのをいってにひきうけてむすびきる。

動詞はモノやヒトのありようについてなにかをのべるといふコトガラ的な意味をになう面から、コトガラに対するハナシテのとらえかたや、あいて（ききて）に対する態度、きもちをあらわしわける面にいたるまで、客体的なレベルから主体的なレベルにわたってのさまざまな表現をうけつ。そのため、多様な内容面をあらわしわけるための多様な文法的なかたちを分化、発達

させている。形態論が、単語の文法的なかたちをとりあげる以上、動詞のゆたかな語形どものなりたちや対立関係をしかるべく位置づけることは、困難さはあってもさけてはとおれない。

## □動詞の語形

動詞トルを例にとれば、トル、トッタ、トレ、トローなどはトルと別の動詞ではなくて、トルの語形である。これらのかたちは、みなおなじ意味を共有している。それは、現実の具体的な動作としてのトルことである。つまり、じびきの意味が共通である。このため、じびきの意味のちがう単位である単語を登録するじびき、辞典には、このような語形どもをのせる必要はない。

一方で、トル、トッタ、トレ、トローはそれぞれ意味がちがうともいうことができる。たとえばトルとトッタとでは、はなしてがはなしをする時点より以後のうごきか以前のうごきかにかちがいがある。また、トルとトレだとあいてに対するはなしでの態度がちがう。これらのかたちは語彙的な意味はおなじでも文法的な意味が別々なのである。

なお、おなじトルでも、いいおわりのトルとトル ヒトというときの連体的なトルとでは、文のなかで述語になるか連体修飾語になるかという、文中での役わりにかちがいがある。このちがいも語彙的な意味のちがいでなくて、文法的なちがいである。

## □分析的な語形

動詞の語形は、トル、トッタ、トレ、トローのようなもののほかに、トッテ イル、トッテ オク、トッテ モラウ、オトリニ ナルなど、二単語からなるまとまりがある。これらも、語彙的な意味トルがかわらぬものとしてつらぬいている点で、トル、トッタほかと同様、動詞トルの語形であることにはかわりはない。イヌガ イタ、(昨夜) アメガ フッタ、というが、アメガ イタ、とはいえないのに対して、アメガ フッテ イタ、といえるのはこのイタが本動詞とはちがってきている(文法化してきている)ためである。二単語からなる語形は分析的なかたちとよばれる。これに対して、トル、トッタのようなかたちは総合的なかたちという。

分析的な語形がはなしことばでマトマリ性がつよまってあらわれることがある。トッテル、トットク、トットクのように。方言でも両者が共存していることがあるし(喜界島方言トゥティ ヲウイ、トゥトウイ)、また、まとまったかたちしかつかわれなくなっていることもある(九州本土方言などのトットル、トットョルなど)。後者のばあいはすでに総合的なかたちとしてもいいだろう。

## □国文法での～形

国文法での～形の、ここでいう語形とのちがいをあげておく。

- ・語形と語形といえないレベルの単位とが、～形として同列にならんでいる。

終止形、連体形、命令形…語形

未然形、仮定形 …語形とはいえない

連用形 …語形のばあいとそうでないばあいとがある

- ・動詞が文法的な機能や意味のちがいによってかたちをかえることを活用というから、動詞の文法的なかたち、語形のことには活用形とよんでさしつかえないが、文中でそのままそれだけでつ

かうことのできるかたちにかぎられる。だとすれば未然形、假定形などは活用形とはいえない。

- ・トツタも動詞+助動詞という二単語からなると説明されるので、総合的なかたちと分析的なかたちの区別という常識がとうじない。

## □語形のつくりかた

動詞の語形をすべてとりだすと、それらを外形（表現面）から整理することができる。

たとえば、トル、トレ、トロウ、トリ、トレバなどとトツタ、トツテ、トツタリ、トツタラなどでは、かたちのつくりかたがちがう。後者からはトツ - という共通部分がとりだされるが、前者にはそれはみとめられない。カナがきではト - の部分が共通するだけだが（これはトツテ以下でも同様）、ローマ字表記すれば、toru, tore…となって、共通部分 tor- がみつかう。こうして、トルの総合的な語形はおおきくふたつの系列のかたちにわかれることがわかる。

トル以外の動詞でもカツ、オモウ、トブ、ヨム、カク、オヨグなどはふたつの系列のかたちをもつ。この種の動詞はそれぞれ、トルートツタにあたるかたちを主要形 principal parts として登録しておく。

トルに対して、ウケル、オキルのような動詞はタ形をつくっても、トルートツタのばあいとちがって、ウケルーウケタ、オキルーオキタのようにおなじひとつのウケ、オキにル、タがそうだけである。この点で、ウケル、オキルなどはトルのような動詞とは語形のつくりかたのタイプがちがう。つまり、活用タイプがちがう。

さらに、スルーシタ、クルーキタなどは、これだけみても、トルともウケルとも別であることがわかる。

## □基本的な活用タイプ

動詞の基本的な活用タイプは、主要形の対立のしかたのちがいに応じて、つぎのように整理される。（語例省略）

I 1	トル	トツタ
	カツ	カッタ
	オモウ	オモッタ
2	ヨム	ヨンダ
	トブ	トンダ
	シヌ	シンダ
3	カク	カイタ
3'	オヨグ	オヨイダ
4	ハナス	ハナシタ
II	ウケル	ウケタ
	(オキル	オキタ)
III 1	スル	シタ
	2クル	キタ

国文法式にふつうにいえば、I は五段活用タイプである。トル、ヨム、カク…などの -u をとりさった部分（語幹 stem）が子音でおわっていることから子音語幹動詞、また、その tor - , jom-



ども同様である。ここにも活用現象の不規則性があらわれていることはたしかだが、ここにみられる不規則性は、単にかたちのつくりかたやそのタイプという表現面の問題ではなく、ある文法的な意味をあらわすかたちやワクぐみ（カテゴリー）のレベルの問題がからんでできた、内容面にかかわる不規則性である。

#### □活用タイプをとりだすさいの注意

以上の点をふまえて、活用タイプを整理するにあたって、どういう点に気をつければいいのかをみておく。

主要形はふたつとはかぎらない。たとえば、琉球方言ではみつつたてる必要がある。奄美大島北部方言ヌミュンのむ、の例でしめす。

ヌミュン（ヌミュタ、ヌミュルイバ、ヌミュットウ…）

ヌマン（ヌマズイ、ヌムイ、ヌモ…）

ヌダン（ヌディ、ヌダルイバ、ヌダリ…）

主要形はふたつですむとしても、さきにみたように、命令形をはじめとして規則どおりのつくりであらわれないかたちがでてくることがあるので、主要形にかぎらずひろっておきたい。

埼玉県秩父方言にトラット（とらずと）、ヨマツト、カカツトのようなかたちがあるが、弱変化タイプではウケラツト、地域によってはウケヤツトとなる。分析のしかたによっては、これは主要形のひとつになるかもしれない。しかし、このかたちしかない点からは、他の語幹にくらべてはたらきの負担量が貧弱で、同列にならべて主要形というのはおこがましいようだ。

基本的な活用タイプからずれやすい動詞系列がある。いままでにみてきたものからひろうと、たとえば、尊敬、ていねいなど待遇にかかわる動詞、また、動詞の語形の系列をつくる文法化した動詞、たとえば、ミルがシテ ミルのかたちで活用系列にくわると命令形に単独のミルのとくにみられなかった（…シテ）ミがでてくるなど。

動詞項目の音節数によって、特殊な活用をしめすことがある。語幹が一音節の動詞は、奄美大島北部方言などでは、ときに規則的でない語形があらわれる。

イユン（いう）—イヤン（いわない）—イシャ（いった）

ニュン（みる）—ニヤン（みない）—ニシャ（みた）

語幹がみじかいと、語幹の安定度がいまいちで、語尾のさまがわりにまきこまれて、語幹もすがたをかえる変化が生じやすい。このため、一音節語幹の動詞は活用が特殊化しやすい、というようなことがいえるとしたら、ワラウ、オモウなどのほかにアウ、ユー（イウ、ユウ）、ヨウ、オウなども、アーワ行強変化タイプをしらべるときにはとりあげたほうがよさそうである。

#### □国文法における活用タイプのあつかい

国文法は全体として活用タイプが整理しきれていないため、体系化が十分でない。それは以下のような点にあらわれている。

五段（四段）活用タイプは行ごとにわけたうえでタ形の音声形式にそって整理しないと、語形の区別ができない。カク、サク、ナク…とイクとの区別のさいなどは、それでもまだたりない。もしも、トル、トブ、トク、トグ、トム…のタ形がすべてトツタになるのなら、ひとつにまとめ

てトル、トツタに代表させてもいいかもしれないが。

一方、一段活用タイプは、国文法では上一段、下一段にわけが、このちがいは語幹尾母音 e, i のちがいで、語形のつくりの点でこのレベルまでわけする必要はない。これより五段活用タイプのほうをこわける必要がある。

なお、ふたつの一段活用のあらわれる行をしらべると、

ア行	イル	エル
カ行	キル	マケル
ガ行	スギル	アゲル
サ行	—	ノセル
ザ行	ハジル	マゼル
タ行	オチル	ステル
ダ行	—	デル
ナ行	ニル	ネル
ハ行	ヒル	ヘル
バ行	アビル	ノベル
マ行	ミル	ヤメル
ラ行	コリル	カレル

のように、上一段のほうにあきまができるため、下一段のほうが優勢である。また、下一段タイプはトラレル、トラセル、トレルのような文法的な派生系列をかかえこんでいて、上一段に差をつけている。両者の代表をひとつだすなら、下一段のほうに分がありそうだ。まえにウケル（オキル）としたのはそのためである。琉球方言ウティユン、九州本土にきかれる同系のオテルをみると、上一段系が下一段系に吸収されていることがわかる。

強変化活用タイプにみられるふたつの主要形トル、トツタも、国文法でとりだされているとはいえない。主要形のひとつからとりだされる語幹にあたるトツ - は、国文法では連用形のひとつとされ、トリとおなじワクにおしこめられている。これは音便現象がまさに発音の便宜のためにあらわれていて、トリテートツテ、カキテーカイテ、トビテートンデなどのどちらをいってもいい、(自由変異)時代の活用のあつかいとしてならわかるが、トリタ、トリテ、トリタリ…などはまったくいえない現代にはあてはまらない。

なお、さきあげたトル、トブ、トク、トグ、トム…の動詞の語幹は、国文法の分析だとすべてトで、同音語幹である。ほかの動詞でもそうなるから、日本語はやたらと同音語幹ができることになるが、もちろんこれは日本語の事実などではなく、語幹一語尾の区ざりかたというつづきがまちがっていただけである。なお、ハラム、マタグなどでとりだされるハラ -、マタ - は、これらの動詞の単語つくり上の語根 root として存在していて、語幹はそれぞれ、語末の u のまえの m、g までである点で、うえのばあいとかわりはない。

## □古代日本語動詞の活用タイプ

動詞の活用タイプについて、いままでみてきたことは、基本的に現代日本語(標準語、文章語)の活用タイプを出発点にしていた。日本語が母語であるならこれが一番わかりやすいはずである。

その点で、もうひとつ出発点としてとりあげることのできるのが、古代日本語の動詞である。知識としてこれも活用しないと損である。

ウケル、アケルでなく、ウクル、アクルのようなかたちができたり、シヌル、イヌルのようなかたちがきかれるところは、活用タイプの記述にあたって、古代日本語のワクをしっていたほうがまとめやすい。

また、琉球方言には、アル、イル（オル）にあたる動詞が、トウリユン、ユミユン、ナキユンなどとおなじ〜ユン形でなく、アン、ラウンのかたちであらわれることがあるが、これも古代語の活用タイプをしっていると、納得しやすい。

古代語の動詞の活用タイプはつぎのように分類される。二段タイプを混合変化というのは、uk-u, uk-uru などからとりだされる、子音おわりの強変化タイプの語幹と、uke-ki, uke-mu などからとりだされる、母音おわりの弱変化タイプの語幹とがまざっているからである。大分、宮崎などの豊日方言には、いままこの二段タイプの活用がきかれる。

1. 強変化（四段）
2. 弱変化（一段）
3. 混合変化（二段）
4. 特殊変化（アリ、シヌ、ク、ス）

以下で3までをみるが、それぞれのタイプのあらわれる行はつぎのとおりである。混合変化ではこも下二段タイプが優勢である。ここだけ二行にわけてしめす。

1. 強変化（さく、かぐ、おす、まつ、おもふ、よぶ、のむ、とる）
2. 弱変化（きる、にる、ひる、みる、いる、ゐる；ける）
3. 混合変化 1：う、たすく、あぐ、よす、まず、あつ、なづ、たずぬ、そふ、くらぶ、さむ、おぼゆ、ながる、うう  
2：一、おく、すぐ、一、一、おつ、はづ、一、こふ、ほろぶ、うらむ、くゆ、こる、一

動詞の活用タイプが歴史的にかわってくることがある。それをふまえた感じで、地域的にもちがっていたりする。カッタがカリタにあたる方言があるのは、古代語でカル、タルなどが強変化タイプだったことによる。アク、ウヅムなども現代語のアキル、ウズメルとは強弱のタイプがちがっている。また、ソムとソマルでは強変化の行がちがう。大分（国東など）や福岡できかれるノバス、ノベルの意味の強変化タイプのノブは、古代語の活用としての指摘はめったにないが、琉球方言地域でも、おなじ意味のヌビユンはトゥビユン（トブ）とおなじ強変化活用である。この種のディテールの調査には、各動詞項目について古代日本語の活用タイプをしっておくといいい。

## □活用体系をどうとりだすか

体系とはひとつのマトマリである。マトマリという以上、マトマリにくわわっている複数のモノ（要素）の存在を前提としている。また、マトマリである以上、モノとモノとはたがいにかわりあいながら、かたくむすびつくことによって、ひとつのマトマリをなしている。体系性のあるところには、くりかえし性、シンメトリー性（つりあい性）、規則性などがあらわれる。

体系 system, 構造 structure, 構成 composition

要素 element, むすびつき（つながり、連関、関係） relation

要素がひとつだけでは、むすびつきが問題にならないから、体系はとりだせない。

また、ふたつの要素があっても、対立がないなら、そこに体系はみとめられない。たがいに無関係、無関心なら、単にモノがバラバラにあるだけで、むすびつきは生じていないからである。単語がつねにそのかたちでつかわれるだけだと、その単語は語形変化の体系をもたない。この種の単語は不変化詞とよばれる。また、ボクガイク、キミガイク、三郎ガイク、のように、1人称、2人称、3人称のどれでもイクというかたちがかわらないなら、その動詞は人称にそったかたちの対立、語形変化の体系をもたない。つまり形態論的な人称のカテゴリーをもたない。こうして、はじめにのべたように、最低ふたつの要素が対立していないと、体系はとりだせない。

さきにみた活用タイプも、要素である語形がたがいに対立しながらいくつかのマトマリをなす点で、体系的な存在である。しかし、活用タイプとは語形のつくりかたのタイプのことであって、内容面にはたちいっていない。標準文章語のトッタとトツタリ、トツテはおなじ主要形に帰着する語形だが、意味的には連関はない。

## □体系と下位体系

体系の構成メンバーである要素のひとつひとつが、おなじ資格で体系のしくみにかかわっているばあいと、そうでないばあいとがある。太陽系 solar system のメンバーには惑星、小惑星、ほうきぼし、それに衛星などがあるが、すくなくとも惑星と衛星とは太陽系で同列にならばない。冥王星のあつかいが問題になるのは、それがシステムのとらえかたにかかわってくるからである。惑星と衛星とでひとつの体系をつくって、それが太陽系に参加している。このようなとき、惑星と衛星からなる体系は、太陽系という上位体系のもとでの下位体系である。

言語にあらわれる体系にも上位体系—下位体系の対立がある。終止形、連体形、連用形などが上位の体系をなしているとすれば、終止形に属する叙述法、命令法などのかたちは、その下位体系をなす。つまり、ヨム、ヨンダ、ヨムダロー、ヨンダダローは、終止形の下位体系である叙述法のメンバーだし、ヨモー、ヨメはおなじく命令法のメンバーである。

## □対立の意味＝内容面

ふたつ以上の項（要素）の対立の意味的な側面（内容面）である文法的な意味をとりだして一般化すると、文法的なカテゴリーがとりだされる。文中での文法的なはたらきのちがいがいからも終止形、連体形、連用形などの文法的なカテゴリーがとりだされる。文法的な意味やはたらきのちがいがいによって動詞が文法的なかたち（語形）をかえることを動詞の活用といい、活用の総体は活用体系をなす。

- ・カク（非過去）—カイタ（過去）→時制・とき・テンス（文法的なカテゴリー）
- カク（断定）—カクダロー（推量）→（叙）法・ムード・きもち
- カク（叙述）—カコー（さそいかけ）—カケ（命令）
- ・カク—カカナイ（みとめかた）
- ・カク—カキマス（ていねいさ）
- ・カク—カカレル（態・ヴォイス）
- ・カク—カイテイル（アスペクト・相）

## □パラダイム

うえのような対立を一目瞭然にとらえられるように図でしめしたのがパラダイムである。動詞のパラダイム（活用表）には動詞の活用体系がうつしだされる。活用体系の要素としてあらわれるのは、文のなかでつかわれる動詞の語形である。動詞の語形（カク、カイト、カケ、カイト、カケバ…）は、語彙的（辞書的）な意味はおなじだが、文法的な意味やはたらきがそれぞれことなる。以下では、てはじめに終止形のパラダイムをみておく。質問法のかたちやカクノダほかのノダ形をとりこんだ、ひろげられた終止形パラダイムのことはあとからしめす。また、ひとつの欄にいくつかの語形がはいっているところは、かならずしもひとつの語形のバリエントというわけではなく、表示のつごうで列挙しただけのばあいもある。

## 共通はなしことば

ムード \ テンス		非過去	過去
		断定	カク
叙述	推量	カクダロー	カイトダロー
	さそいかけ	カコー	
命令	命令	カケ	

## 山梨県

ムード \ テンス		非過去	過去
		断定	カク カクダ
叙述	推量	カクラ カクズラ	カイトラ カイツラ カイトズラ
	さそいかけ	カコー	
命令	命令	カケ カケシ	

## 埼玉県秩父郡

ムード \ テンス		非過去	過去
		断定	カク
叙述	推量	カクバー	カイトンバー カイトッタンバー
	さそいかけ	(カクバー)	
命令	命令	カケ	

古代日本語 (これ以外に2種のかかりむすび終止形あり)

テンス ムード		非過去	過去
		カク	カキキ カキケリ
叙述	断定	カク	カキキ カキケリ
	推量	カカム	カキケム
命令	さそいかけ	(カカム)	
	命令	カケ	

形容詞終止形のパラダイムも参考のためあげておく。

イ形容詞

テンス ムード		非過去 (現在)	過去
断定		タカイ	タカカッタ
推量		タカイダロー	タカカッタダロー

ナ形容詞

テンス ムード		非過去 (現在)	過去
断定		シズカダ	シズカダッタ
推量		シズカダロー	シズカダッタダロー

□ことばの非体系性—活用現象にみる

うへの文法の例からみられるように、言語現象は規則性、くりかえし性、シンメトリー性をもつ。全体としてことばは体系的である。しかし、ことばの全体にわたって体系性によっていれざめられているとはいえない。ことばは非体系的な例外現象、不規則性につきまといわれている。不規則性にもいろいろある。

1. 語形のつくりの不規則性

- ・カク、キク、サク、ナク、ヌク…—カイタ、キイタ…  
イク—イッタ (例外)
- ・キル—キッタ・キタ、イル—イッタ・イタ (動詞のちがいにそって過去形が別になる)  
クル—クッタ・キタ、スル—スッタ・シタ…  
ネル—ネッタ・ネタ、ヘル—ヘッタ・ヘタ…
- ・クウ・クル—クッタ (上例と反対に過去形がひとつになる)  
ユウ・イク—イッタ  
カウ・カル—カッタ  
うめあわせ
- ・カク カカレル カケル  
ヨム ヨマレル ヨメル  
スル サレル 「デキル」

- ・カクーカカナイ
- ヨムーヨマナイ
- アルーナイ

## 2. 系列間での不一致（動詞、イ形容詞、ナ形容詞）

- ・ヨミマスーヨムデショー（ヨムデス）
- ・ヨミマシターヨンダデショー（ヨンダデス）
- タカイデスータカイデショー
- ・タカカッタデスータカカッタデショー（タカイデシタ）
- シズカデスーシズカデショー
- ・シズカデシターシズカダッタデショー（シズカダッタデス）

## 3. 周辺のなかたちの他の系列とのかよい

周辺の動詞アルの終止形の活用（形容詞的）—カテゴリー名称、語形の名称は省略する。

アル	アッタ
アルダロー	アッタダロー
（アロー）	
（アレ）	

## 4. 体系での地位と実際の使用とに不一致がみられることがある。

- ・（標準語）ヨミ 連用形、はなしことばでは？
- ・（奄美大島北部方言）ユミュン（よむ）代表終止形、つかうときはふつうしろに終助辞をつける。

## 5. 不規則性は体系変化の痕跡や前兆である。

- ・カク カカレル カケル
- ヨム ヨマレル ヨメル
- オキル オキラレル（→オキラレル：オキレル）
- デル デラレル（→デラレル：デレル）

## 6. 方言などのほうが規則化、体系化がすすんでいることがある。

- ・シヌ→シム、シグ（こどものことば）
- ・カクッケーカイトクケ…の対立（カクッケーは本来のケリにはあられない）
- ・ヨムーヨムッス（ていねいなかたち）…ヨメッス（その命令形）
- ・トルートランートレ…
- オキルーオキランーオキレ…
- ウケルーウケランーウケレ…（一段活用の四段活用化）

## □非体系性はなぜ存在するか

ことばは歴史的に変化する点で、他の記号体系とちがう。その変化のなかで、不規則性、非体系性が生じ、つぎの体系的なつりあいとれるまでつづく。また、ことばは、おおすじでは、有限の単位で無限のデキゴトをうつしとらなくてはならない。このため、意味（内容面）と外形（表現面）とは、基本的に1：1対応しない。言語における多義語、多義形式の存在は、言語の病理現象ではなくて、基本的なありかたである。この点でも、他の記号体系とことなる。

一方では、おなじ内容面をあらわすのにいくつかのかたちがあるという余剰の（あそびの）部分も言語にはある。この点でも、他の記号体系とはちがう。

こうして、言語には、かたちがあつて内容のない無意味要素や、逆に意味があるがかたちがないといえるゼロ要素が存在したりすることになる。こうみえてくると、言語の非体系性は言語の中心的な特徴のようにもみえてくる。すくなくともわれわれは、言語の体系性を重視するさいに、その非体系性を無視してはならないだろう。

体系性と非体系性のからみあいに関連して、うちけし系列の動詞の終止形のパラダイムをみておく。さきあげたみとめ終止形にあわせると、つぎようになる。みとめ終止形にあつたさそいかけ（＝意志）形はうちけし系列ではかけている。命令、つまり禁止のカクナもカカナイほかとはつくりがちがうようだが、これはもとのカク - ナというきれめが、kak - una へずれたとすれば、kak - anai ほかとかわりはない。

カカナイ	カカナカッタ
カカナイダロー	カカナカッタダロー
カクナ	

カコーにあたるうちけし動詞のかたちがあつた時代のパラダイムには、カクマイがくわわっていたはずである。このカクマイが推量形でカカナカロー、カカナイダローのようなかたちへとかわり、さそいかけ（＝意志）形ではもちこたえられなかった。この点、みとめ動詞のカコーのふるまいとはちがう。また、カクマイが本来カク - マイだったことはカク - ナと同様である。だがカクナはのこって、カクマイはのこれなかった。なぜだろうか、カクマイ形は歴史的にみてカカジ、カカザラムなどのかたちとのせりあいをへて、なんとかうちけし系列のパラダイムの中心部にくいこんだかたちとみられ、系列にあわせるため、カコマイ、カカマイなどあれこれ苦心しているさまが方言からわかる。標準語ではその努力のあとのみえてこない。また、カクマイを土台にしたカクマカッタのような過去形はもちろんつくりあげることができなかった。こうして孤立してふみとどまることになったカクマイのパラダイム内の位置は、安定したものとはいえない。カクマイがきえることと関連があるだろう。

なお、禁止のカクナも方言によって、カキナとか、ナカキノ系のカイチョ、さらに八丈島方言のカキンナカなど連用形由来のかたちが出てくることがある。カクナが唯一安定したかたちではなかったことのアラわれともおもえる。

カカナイ	カカナカッタ
カクマイ	カカナカッタロー
カクマイ	
カクナ	

### □かかりむすび

古代語にみられるかかりむすびにでてくる連体形、已然形は、それぞれをでどころとしているが、終止形のひとつとしてはたらいっているの、形態論的にも終止形としてあつかうことができる。

～ゾ（～ナム）ヨム、～コソ ヨメのヨム、ヨメはふつうの終止形のヨムとともにのべたて形になるが、～ヤ ノム、～カ ノムはそれぞれたずね形、うたがい（＝たずね）形にあたり、いわゆる連体形でむすぶかかむすびはムードの点でひといろではない。

琉球方言はゾのかかむすびにあたる終止形が、また八丈方言にはコソのかかむすびにあたる終止形がのこっている。

#### ドウかかむすび（奄美大島方言）

～ドウ	ユミュル	ユダル	ユミュタル
-----	------	-----	-------

ドウは古代語のゾにあたるかたち、～ル形はふるい連体形である。なお、名詞をかざる連体形はユミュン、ユダン…のようにあたらしくなっていることがおおい。このばあいは、かかむすび終止形と連体形は外形＝表現面のうえでも区別できる。

奄美大島方言になぜゾ系のかかむすびがのこったのかは、このふつうの終止形が、本土方言のように連体形を出発点とするかたちにくみかえられていなくて、ユミュリのような旧連用形にあたる終止形や、それから出発した、やはり連体形とは無縁の出発点からの「m 語尾形」といわれるユミュンなどであったことからだろう。

#### □たずね—うたがい終止形

うえにみてきた終止形のほかに、質問、疑問の述語形式の基本的なものを形態論的な終止形としてとりだすことが、方言の文法などで必要になってくる。

琉球方言には、ヌミュムイ（奄美大島方言 ノムカ、ノムノカ）のようなかたちがたずね形としてでてくる。このかたちはヌミュとムイにきれるが、ヌミュは一部方言をのぞいて独立用法をもたないから、融合的な総合的なかたちである。その点で、ノムダロー、ノンダダローはまだ膠着的である。ノムダローが終止形にくだるとしたら、つくりの点でヌミュムイもそれ以上に終止形にくだる資格がある。他のたずね形、うたがい形はヌミュンニヤ、ヌミュリ(ヨ)、ヌミュンカイ など、標準語 ノムカ、ノムノカとおなじつくりだが、ヌミュムイといっしょにたずね形、うたがい形のメンバーをなしているので、これらも活用形にあらわれることになる。

うたがいはこたえをもとめない点でたずねと対立する。また部分たずねは疑問詞をともなうたずね文をつくる点で、全体たずねと対立する。奄美大島方言ではこれらのうたがい文、たずね文をつくる述語形式が、形態論的な終止形のレベルで区別されている。なお、うたがいとたずねとでは、他者とのつたえあいという言語の基本的な機能をかかると、あいてのこたえをもとめないうたがいのほうが二次的とおもえるが、以下に例示する奄美大島北方方言では、うたがい形のほうに推量形もあらわれるなど、属する語形がおおいのでそこから表示する。

#### 終止形 うたがい形

	テンス		
ムード		非過去	過去
断定		ヌミュンカイ	ヌダンカイ ヌダカイ ヌデイカイ
推量		ヌミュロカイ	ヌダロカイ

カイのところはカヤー、カなどのかたちもある。

たずね法・全体たずね

ナ形	ヌミュンニヤ	ヌダンナ ヌディナ
ムイ形	ヌミュムイ	ヌダムイ

たずね法・部分たずね

ヌミュリ (ヨ)	ヌディ (ヨ)
----------	---------

部分たずねのヨをつけないかたちはのべたて断定形とおなじである。

□ノダ系列 (名詞化) の述語のあつかい

標準語には、ノム、ノンダ以下の終止形のほかに、ノムンダ、ノンダンダなどノダ (はなしことばではふつうンダ) がくっついた述語形式がある。ノダ系列は自身もンダ、ンダッタのようにテンス変化する。また、推量系列ではダローノダはなく、ノムンダロー、ノンダンダローのようになる (ノムンダッタダロー、ノンダンダッタダローはどのくらいでてくるのか?)。

ノダ系列は、こうして、ふつうのスル系列とは別の活用系列としてとりあげないと、活用体系の表示に混乱をきたす。

ただし、スル系列の語形とノダ系列の語形とを、簡単に分離できるとはかぎらない。たずね文をつくるさいのスル、スルダロー、スルカ、スルダローカと、スルノ、スルンダ、スルンダロー、スルノカ、スルンダローカとは、いりくんだかたちであらわれる。

ノダ系列はスルノ、シタノという名詞化したかたちをもとにつくられているが、他にもノをふくまないスルダ、シタダのようなかたちもみられる。このダ系列のあつかいもノダ系列と同様である。ノダ系列とダ系列がともにみられるばあいもあるようだ。また、名詞化したかたちという点では、ふつうの終止形も、その前身の連体形は、古代語のばあい、名詞形 (準体形) と同音形式だったわけだから、名詞化と無縁だったとはいえない。連用形起源の終止形にも、おなじく動詞 = 名詞の分化の十分でない段階をかんがえる必要があるかもしれない。

□命令法と希求法

命令形ノメの周辺にはノメヨ、ノミナ、ノンデ、オノミ、ノンデ クレ、ノマナイカ (しりさがりのイントネーションで) などのかたちがある。これらが命令形にはいるかどうか、はいるとしても下位区分として、うながし、すすめ、たのみなどのかたちをたてるのがいいかなど、まよところである。

さらに、あいてに対するはたらきかけ性が、まったくきえて、はなしてののぞみ、ねがいをあらわすようになったときは、もはや命令法とはいえない。奄美大島方言にはヌマダナ (ヤー) というかたちがあって、はなしてののぞみ、ねがいをあらわす。これやおなじ文字のヌマバヤーは希求法とよぶことができる。

命令と希求との関係は、たずねとうたがいの関係になぞらえてとらえることができる。ふるくから命令法と希求法がわけられているのに、質問法と疑問法というのはきかれぬ。命令と希求で動詞の語形がちがう個別言語が、たまたまモデルとして一般化しているのだろう。なお、叙述法にもあいてを予想する報告形とあいてをもとめない記述形のちがいがあるとしたら、うえと同様にとらえることになる。

## □終止形のうつりかわり

終止形は文をいいおさめる述語になる語形である。述語がすべて終止形であるということにはならないが、述語の役わりを演じる中心は終止形である。

ただし、未知の言語で動詞の終止形をしらべるとしたら、その言語の文の構文論的な述語をとりだすことから始まる。多様な述語形式のなかで、くみたてが単純で他の述語形式の出発点とみなされ、また、出現する頻度もおおいのが形態論的な終止形ということになる。

終止形は歴史的に変化する。日本語では古代語の終止形はきえていて、いまの終止形は古代語の連体形から発している。また、古代語にもアリ、ヲリなどの連用形と同形の終止形がヨム、カクなどの終止形のほかにみられる。この種の連用終止形が、ふつうの終止形が発達するよりまえの、動詞の一般的な終止形だったかもしれない。

関西方言のうちけし終止形にはヨマンのほかにヨマヘンのようなかたちがあるが、これはもともとヨミハ センにあたる強調形である。それが強調のいろあいをうしなって、ニュートラルな終止形のメンバーになった結果、かえって本来のヨマンのほうが1人称のはなしての意志をあらわすといったような特殊ないろあいをおびてきている。ヨマンがおいだされてヨマヘン一本になるとまではいかないが、この種のあそいは、おとろえかけたふるい終止形のあとめをねらううごきとして、述語形式全体をまきこんで進行する。

琉球方言において、おおくの奄美の諸方言にはユミュン系とユミュリ系のふたつの終止形の対立がみられるのに、沖縄本島方言ではユミュン系に一本化しているのは、うえにみたような過程がすすんだ結果のすがたである。

## □代表形のとりだし

動詞項目の代表形としてじびきのみだしにたつのは、ヨム、カク…などの終止形ということになっている。これが、うえにみた、奄美諸方言のように、ユミュン、ユミュリというふたつの終止形がはりあうところでは、簡単にはきめられない。ふたつをくらべて、ふつうの（ニュートラルな、マークなしの）かたちがみだしにたちやすいが、表現面でのマークなしと内容面でのマークなしとが一致しているとはかぎらないので、やっかいである。さらに、現代の方言のなかにも、動詞のもろもろの語形のなかで、一番ふつうのかたちとして、連用形があげられる方言があったりする（奄美德之島方言）。

なお、うえにのべた表現面と内容面のしるしづけ性のくいちがいは、具体的には奄美大島北部方言にみられる。そこでは、表現面でマークなしのユミュリ形に、m系のマークがついて、いまのユミュンにいたっているが、表現面では出発点のユミュリはイマ、ココでハナシテがとらえたデキゴトをさししめす（メノマエ性）ことに内容面では特化してしまって、マークなしの優性の内容面はユミュンのほうにゆずっている。

## □語形系列と機能形式のとりあげかた

日本語の動詞の語形の系列は、たとえば中心となるヨム系列なら、ヨム、ヨンダ、ヨメ、ヨモ…の終止形の範囲をこえて、ヨミ、ヨンデ、ヨメバ、ヨンデモ…のような連用形、条件形や他の機能のカテゴリーへとつらなっている。これはヨマナイ以下のうちけし動詞の系列やヨミマスほかのていねい動詞の系列、その他ヨマレル、ヨンデル、ヨンデ モラウなども同様である。

活用体系はこれらの語形の系列にそってとりだしていくのが順当なあつかいといえる。終止形のヨム、ヨンダ、と連体形のヨム、ヨンダとのちがいは、ヨムの系列をタテにとりあげることによってかんがえることができる。

一方ではおなじ終止形のレベルで、ヨムとヨミマス、またヨムとヨンデイルをつきあわせることもかんがえられる。実際の言語活動では、文章をかくときなど、ヨム形にしようかヨンデイルにするかまよふことがある以上、この種のヨコのつきあわせも必要だ。

ただ、終止形をとりあげるさい、すべての語形系列の終止形を一度にとりあげてしまうと、語形のつくりの系列にそったあつかいが途中でたちきられて、せつかくの形式的な統一性を活用しないことになる。系列のまとまりがほやけないように、はじめはヨコすべりはできるだけおさえて、標準語では肯定系列終止形のつぎに、うちけし系列終止形をみて、さらにていねい系列の肯定、否定をみるぐらいだろう。方言の動詞活用では、地域によって、ていねい系列がみられないことがある（ただし敬語動詞はある）。また、ていねい系列がなお敬語性（謙讓）をひきずっている感じのところもある。

ていねい・みとめ・終止形

ヨミマス	ヨミマシタ
ヨムデショー	ヨンダデショー
ヨミマショー	
ヨミナサイ	

ていねい・うちけし・終止形

ヨミマセン	ヨミマセンデシタ (ヨマナカッタデス)
ヨマナイデショー	ヨマナカッタデショー
(ヨミマスマイ)	
((オ)ヨミナサンナ)	

□語形系列のウチカソトか

奄美大島北部方言の動詞の活用体系で、一番中心となる語形系列は、テンス的に現在未来形、シタ過去形、シヨッタ過去形のみつつにわけられる。それぞれの m 語尾断定形をしめす。

ユミュン	ユダン	ユミュタン
------	-----	-------

ところで、現在未来形ユミュンのタテの系列には、ユミュリ、ユミュロ（よむだろう）などのかたちと、ユモ（よもう）、ユムイ（よめ）などのかたちとがまざっている。現在未来形から目を転ずれば、シヨッタ過去形ユミュタンは、ユミュ-を共通にするユミュリほかのグループのメンバーであるのに対し、シタ過去形ユダンはユモほかのグループのメンバーということになる。

ここで問題になるのはユミュン—ユダンのグループとユミュン—ユミュタンのグループとを別にしたてることがなりたつかである。つまり、ユミュンがふたつの同音形式にわかれ、ユミュン—ユダんが中心となる語形系列であるのに対して、ユミュン—ユミュタンはヨム—ヨンダに対するヨミョール—ヨミョータのように、中心でない別の語形系列というあつかいになる。これでいいか。

ユミュン1	ユダン	ユミュン2	ユミュタン
-------	-----	-------	-------

ユミュンの同音形式としてのあつかいがいいかどうかは、ユミュンの意味＝内容面をみてきめることであろう。過去テンスに二系列あるからといって、ただちにユミュンが同音形式にわれるとはかぎらない。ユミュタンはこの方言では過去ニヨクソウイウコトヲシタという習慣をあらわすほうへと意味が特殊化していて、ユミュンの意味のどれかとひとくみにすることはむずかしい。ユミュンにヨミヨールにあたるような意味があったとしても、それともセットにはならないとおもわれる。そして、奄美諸方言のおおくは、とりわけユミュリでなくユミュンで、動作進行の意味がきえかかっていることがおおい。

#### □別の語形とひとつの語形のバリエント variant

終止形にかぎらず、パラダイムの別ランには、機能や意味の対立する別々の語形がはいる。しかし、その種の内容面のちがいがみられず、表現面である音声形式が若干ちがうだけのかたちならぶことがある。この種のものはひとつの語形のバリエントであって、パラダイムでいえば別々のワクにではなくて、おなじひとつのワクにおさまるかたちである。ヨンダローにはヨンダダローと別のワクをつくらなくていい。

ヨムダロー	ヨンダダロー、ヨンダロー
-------	--------------

別の語形かバリエントかは、現実には区別しにくい。バリエントといっても、まったく同一というわけではなく、つかいての年齢差などはでてくる。また、あらたまつたばあいと日常的なばあいとでのつかいわけなど、文体的なちがいなども、あつかいかたにまよう。ヨメバとヨミヤー、ヨンデ イマスとヨンデマス…など。

執筆にあたって参照した文献は別稿「動詞非終止形の体系づけ」(『別府大学大学院紀要』16)の末尾に記した。